『千里集』に見られる中国文学的要素

黄　一丁

はじめに

『千里集』は、寛平六年（八九四）大江千里が宇多天皇の勅命によって編纂して献上した歌集である。千里は本集の序文で自分が「側聴二言詩一、未レ習二艶詞一」と述べている。上下の文脈から、ここにある「艶詞」は和歌を指すことが分かる。千里は、漢詩はともかく、和歌の才能はまずないと謙遜している。そこで、序文に「古今和歌、多少献上」とあるように、宇多天皇に和歌を献上せよと命じられた千里は、「纔捜二古句一、構成二新歌一」(一)と述べたように、白居易などの中国詩人による漢詩句を題にして和歌を翻案した。この事情からも、『千里集』が中国詩と緊密に関わる歌集であることが分かる。

本稿は、『千里集』に見られる中国文学より摂取した特徴を論じるものである。

一　『千里集』四季部に見られる白居易の詩想に関する先行研究

『千里集』は、九つの部立を有し、前半の四つが四季部である。以下の二章は、まず前半の四季部に注目する。

和歌集に見られる四季部は、『万葉集』巻八・一〇に起源を持ち、『新撰万葉集』巻上、『寛平御時后宮歌合』などの『千里集』より先立つ和歌資料にも見られる。『万葉集』に起源を持つ四季部は、『芸文類聚』『初学記』などの中国類書における四季部に学んでいるであろう(二)が、千里の時代には、このような構造は既に定着し、和歌集の編纂の伝統となっていたと見なすべきであろう。『千里集』も、それを歌集の伝統として踏襲していると考えられる。

千里は漢詩を和歌に翻案するとともに、本来中国文学にしか存在しない詩想も和歌の世界に導入したと考えられる。本章はまず四季部を中心に、『千里集』に取り入れられた中国の詩想に関する先行研究を整理する。

『千里集』の四季部の歌順は、後に成立した『古今集』に見られる完璧な逐時的構造(三)ではないものの、「春」「夏」「冬」の末尾には、当該季節の終わりを主題とする歌群、即ち、惜春を詠む晩春の歌群と、納涼を詠む晩夏の歌群と、嘆老を詠む歳

暮の歌群が存在する。この三つの歌群に、中国詩の影響が見られることは先行研究によって既に指摘されている。

日本古典文学で盛んに詠まれる「三月尽」という惜春の主題が、白居易の詩想に触発されたものであることは、平岡武夫氏によって指摘されている(四)。そして、田中幹子氏は、『千里集』「春」の末尾部に存在する惜春の歌群に注目し、それも同じく白居易の惜春意識の受容であると指摘している(五)。

送春争得不殷懃
あかずのみ過ぎゆく春をいかでかはこころにいれてをしまざるべき（一五）

春光只是在明朝
かねてよりわがをしみこし春はただあけむ朝ぞかぎりなりける（一六）

両処春光同日尽
春をのみここもかしこもをしめどもみなおなじ日につきぬるかうさ（一七）

可憐虚度好春朝
あはれとは我が身のみこそ思ひけれはかなく春をすぐしきぬれば（一九）

惆悵春光留不得
なげきつつ過ぎゆく春ををしめどもあまつ空からふりすてていぬ（二〇）

一歳唯残半日春
ひととせにまたふたたびもこじものをただ日がなこそはるはのこれる（二一）

『古今集』などの後世の和歌集において大きな影響を及ぼした「三月尽」という、中国文学に由来する意識を、はじめて歌集の配列に応用した実例は、『千里集』である。

「三月尽」の他、『千里集』「夏」の末尾部には、納涼を主題とする歌群が存在する。岩井宏子氏は、この歌群に注目し、それに見られる納涼の意識が白居易による納涼詩の影響であると論じている(六)。

月照平砂夏夜霜
月影になべてまさごの照りぬればなつの夜ふれる霜かとぞみる（三一）

但能心静即身涼
我が心しづけきときはふく風の身にはあらねど涼しかりけり（三二）

澗路甚清涼
山たかみ谷を分けつつゆくみちはふきくる風ぞすずしかりける（三三）

納涼を主題とする歌群は、『古今集』に見られないが、『後撰集』から晩夏の歌群にあるようになった。和歌集において、はじめて納涼の歌群を晩夏に配列し、夏歌に導入したのも『千里集』である。

続いて、本集の「冬」の末尾部には嘆老を詠む歌が存在する。北山円正氏の指摘している(七)ように、『古今集』時代の歳暮歌に散見する嘆老意識は、白居易詩の受容であると考えられる。

北山氏は直接『千里集』の歌を用例として検討していないものの、下記の千里歌は白居易詩を句題としているため、白居易詩の影響下に誕生したものと考えられる。

鬢雪多於砌下霜
我がかみのみなしら雪と成りぬればおける霜にもおとらざりけり（六一）

年年只是人空老
としどしとかぞへこしまにはかなくて人はおいぬるものにぞありける（六二）

老眠早覚常残夜
老いてぬるめははやさめぬとこしなへよはにあくればねでのみぞふる（六四）

長年都不惜光陰
かくばかりおいぬと思へばいまさらにひかりのつくるかげもをしまず（六七）

歳暮の嘆老も三月尽や納涼と同様に後世の文学において大きな影響を及ぼした主題である。冬歌において嘆老を詠む現象は、『千里集』に先立つ『寛平御時后宮歌合』には既に窺われるが、『千里集』に存在する用例は、和歌史上において早い段階の用例であると認められる。

『千里集』の四季部に見られる三月尽、納涼、歳暮の嘆老という三つの主題は、『古今集』時代に新たに中国詩より摂取したものである。特に、『千里集』が三月尽と納涼との二つの主題を、晩春と晩夏の歌に詠み込むことは現存する資料では最古であるため、極めて重要な意義を持っている。

二　『千里集』と晩秋の雁

先行研究は、『千里集』が「春」「夏」「冬」の末尾部において中国の詩想を摂取したと指摘している。実は、秋の末尾部も中国の詩想を摂取したと考えられる。続いて、本章は「秋」の末尾部に位置する「雁」を詠む歌群に注目し、それに見られる中国文学の受容について論じる。

秋雁過尽無書至
秋の夜の雁は鳴きつつ過ぎゆけど待つ言の葉は来る年もなし（五二）

寒鴻飛急覚秋尽〔八〕
ゆく雁の飛ぶこと速く見えしより秋の限りと思ひ知りにき（五三）

寒雁〔九〕声静客愁重
鳴く雁の声だに絶えて聞こえねば旅なる人は思ひまさりぬ（五四）

三首の歌意は明瞭である。五二番歌は、秋の夜に手紙を届けるための雁が鳴きながら飛び過ぎ、待っていた手紙は本来既に届いたはずなのに、全く来ないことを詠んでいる。歌にある「言の葉」は、句題における「書」の翻案と考えられ、手紙を指す。句題の白居易詩は、『漢書』にある有名な「鴻雁伝〻書」という故事を踏まえている。

天子射二上林中一、得レ雁、足有レ係二帛書一、言三武等在二某沢中一（『漢書』　巻五四　李広蘇健伝第二四）

匈奴に捕えられ、長年漢に帰れない蘇武が、雁に手紙を託して朝廷に知らせて、故郷に帰れたという故事である。中国古典文学では、「雁」と「書」との組合わせは基本的にこの故事を踏まえている。漢籍に精通する千里も白居易詩が蘇武の故事を踏まえていることを知っていたであろう。恐らく蘇武の故事に、「長年漢に帰れない」という要素が存在するからこそ、千里が、句題にない「年」という表現を加え、「無書至」を「言の葉は来る年もなし」と敷衍したと考えられる。

五三番歌は、雁の速く飛ぶのを見たので、秋の終わりが間もなくやって来ると知ったと詠んでいる。五四番歌は、秋の雁の鳴き声さえ聞こえない時に、旅人の愁えは増すと詠じている。

この三首は共に雁という歌材を詠む一連の歌であるため、一つの歌群と見なすべきであろう。五三番の句題にある「秋尽」及びその翻案と考えられる「秋の限り」という表現からすれば、五三番歌は秋の終わりを詠むことが分かる。加えて、本集の「春」「夏」「冬」の末尾部には、季節の終わりを主題とする歌群がそれぞれ存在するため、「秋」の末尾部に位置するこの歌群も秋の終わりを詠む歌群だと類推してよいであろう。

また、雁と晩秋の関連性は、本集四六番歌からも窺われる。

旅雁秋深独別群
行く雁も秋すぎがたに独しも友に後れて鳴き渡るらむ（四六）

この歌は、上例の三首の配置場所より少し前に存在する。下線部の表現を配慮すれば、この歌における雁と晩秋の関連性は明らかである。このような関連性は、五二～五四番歌に見られる雁に関する季節観と一致する。

上述したように、『千里集』の秋部には、雁を晩秋の景物として詠む歌は四首存在する。しかしながら、雁を晩秋の景物として詠む現象は、『古今集』時代の一般的な状況とは異なっている。『古今集』前夜の暮秋歌は、雁ではなく、紅葉への愛惜を詠っているものが多い。

紅葉ばは袖にこきいれてもていでなむ秋は限と見む人のため（『古今集』秋歌下　三〇九　素性）

竜田川秋は水なく浅せななむ飽かぬ紅葉の流るれば惜し（『是貞親王家歌合』　一三）

散らねどもかねてぞ惜しき紅葉ばは今はかぎりの色と見つれば（『寛平御時后宮歌合』　九六　初出・『新撰万葉集』　一〇五・『古今和歌集』秋歌下　二六四　読人不知）

寛平御時ふるきうたたてまつれとおほせられければ、たつた河もみぢばながるといふ歌をかきて、そのおなじ心をよめりける

み山よりおちくる水の色見てぞ秋は限と思ひしりぬる（『古今集』秋歌下　三一〇　興風）

上例の四首は全て『千里集』の時代に近い暮秋歌であり、紅

葉を晩秋の歌材として詠っている。『千里集』五三番歌を『古今集』興風歌と比較すれば、『千里集』と『古今集』との発想は明らかに異なることが分かる。歌の構造から見ると、『千里集』五三番歌は『古今集』三一〇番の興風歌と類似し、「……見れば……思ひ知りぬる（知りにき）」の形で理解しうる。一方、千里歌と興風歌における歌材を対照すると、興風は紅葉色になった河水を見て秋が終わることを知ったことに対して、千里歌は、雁の速く飛ぶ姿を見て秋の尽きることを知った。この点は、『千里集』と『古今集』とにおける暮秋歌の発想の最も大きな相違点である。

続いて、雁という歌語に対応する月について考える。『千里集』では雁が晩秋九月の歌語として詠まれることに対して、『古今集』では仲秋八月の歌語として詠まれる(十)。従って、雁を八月の歌語とし、紅葉を暮秋の歌語として詠むのが一般的な『古今集』時代において、雁を暮秋の歌語として詠む『千里集』における当該歌群は極めて独特と言わざるを得ない。『古今集』の撰者を含む当時の他の歌人にとって、晩秋九月に詠むべき歌語が紅葉であったことに対して、千里は雁を晩秋九月に詠むべき歌語だと考えた。

九月に雁を詠む現象は、同時代の和歌では珍しいが、白居易詩などの中国文学では珍しくない。

塞鴻飛急覚二秋尽一、隣鶏鳴遅知二夜永一。（『白氏文集』巻一四　「晩秋夜」）

晴虹橋影出、秋雁櫓声来、（中略）明朝是重九、誰勧二菊花盃一。（同　巻五四　「河亭晴望」）

上例の二首は、晩秋または九月に雁を詠む実例である。「晩秋夜」は、『千里集』五三番歌の句題出典でもある。詩題を一見して晩秋の作だと分かる。「河亭晴望」の尾聯にある「重九」は「重陽節」を指すため、詩にある「秋雁」も九月のものであることが分かる。『千里集』の句題を選び出すために、千里が『白氏文集』を熟読したことは想像に難くない。ならば、五三番歌の句題出典である「晩秋夜」は勿論、「河亭晴望」も千里の目に入った可能性は高い。意図的であろうが、非意図的であろうが、千里が白居易詩における雁の季節に影響を受けていると考えられる。

白居易詩に見られる雁の季節に関する認識は、白居易独自の発想ではなく、中国文学に古くから存在する思想であった。『礼記』月令における以下の記述から、それを端的に窺うことができる。

季秋之月、（中略）鴻雁来賓。（『礼記』月令）

『礼記』月令に見られる雁に関する記述は、白居易詩の下敷きとなるであろう。それのみならず、このような考え方は上代から既に和歌にも影響を与えていた可能性がある。『万葉集』には

九月のその初雁のつかひにも思ふ心は聞こえこぬかも（巻八　秋雑歌　一六一四）

という歌が存在する。この歌に見られる「初雁のつかひ」という表現が、前述した『漢書』に見られる蘇武の故事を踏まえるという解釈は現在の通説である(十一)。新大系の注釈(十二)の指摘しているように、九月に雁を詠むことは、前掲の『礼記』月令における雁の季節に関する記述と合致する。『礼記』は上代から日本人に活用されている漢籍であるため、この歌の詠者が『礼記』月令における記述の影響を受けていても不思議ではない。また、『千里集』に先立つ『文華秀麗集』にも、

雲天遠雁声宜レ聴、檐樹晩蟬引欲レ殫。(「晩秋述懐」　巻上　五〇　姫大伴氏)

という雁を暮秋の詩材として詠む一聯が存在する。このような詠み方も、中国文学における雁の季節に影響を受けているものと考えられる。

『千里集』以前の和歌及び日本漢詩は既に中国文学における雁の季節に関する考え方を摂取している。時代の下る『千里集』に見られる晩秋の雁は、白居易詩の影響でありながら、『礼記』月令に見られる雁の季節に関する記述をも下敷きにしているであろう。

以上の分析を通じて、千里詠に見られる雁と晩秋との関連は、中国文学、特に白居易詩に存在する雁の季節に関する認識の影響を受けている。この結論を、前引の田中幹子氏、岩井宏子氏、北山円正氏の先行研究の結論と合わせて考えれば、千里は、四季部の末尾部において、白居易詩を通じて中国文学における季節に関する詩想を多く摂取していることになる。この傾向は、早く小島憲之氏の指摘している「平安人の尽日的発想は、「白詩文学圏」の文学に基づくところが大である」という結論(十三)と合致する。

三月尽、納涼及び歳暮の嘆老の思想は、後世の日本文学に大きな影響を及ぼした。それに対して、晩秋の雁が後世の文学において大きな反響を得られたとは言えない。晩秋の歌に雁を詠むという中国文学の和歌における影響は限定的であり、『千里集』で途切れていると言ってもよい。

三　『千里集』と初夏の惜春

『千里集』四季部の歌の配列に、中国の詩想を摂取したと思われる箇所は、上述した各季節の末尾部以外に、初夏の歌にも見られる。『千里集』「夏」の一一首に、明らかに初夏を詠むと確認できる歌は以下の四首である。

春条長足(十四)夏陰成
木の芽萌え春栄えこし枝なれば夏の陰とぞ成りまさりける(二一二)

鶯多過春語
鶯は過ぎにし春を惜しみつつ鳴く声おほき比にざりける(二一三)

鶯声渋漸稀
鶯は時ならねばや鳴く声のいまは稀らに成りぬべらなる(二一五)

春尽啼鳥急

かぎりとて春の経ちぬる時よりぞなく鳥の音もいたく聞こゆる（二七）

二七番歌の句題出典は不明だが、他の三首の句題出典は全て白居易詩である。二二番歌は夏の巻頭歌である。句題出典詩の題は「樟亭双桜樹」である。そこから、句題にある「春条」は原詩では桜の枝を指すことが分かる。春の枝が繁って夏に木陰になっていると詠んでおり、夏の蔭を春の枝と対照させている。この手法は、白居易に愛用されており、桜のみではなく、ライチや石榴などを詠む詩にも散見する（十五）。翻案歌も句題の手法を踏襲し、春に木の芽が生えて、夏が来る今は木陰になっていると、春から夏へという季節の変化を詠っており、夏の蔭を春の枝と対照させつつ、春の状況を回想している。

二三番、二五番歌は共に鶯を詠っている。『古今集』時代には、鶯は一般的に春に詠まれる歌語であり、夏に詠む例は珍しい。夏に鶯を詠むという季節の齟齬を解消するためか、二三番歌では、千里は鶯が夏に鳴く理由を「すぎにし春を惜しみつつ」と敷衍した。また、二五番歌で「鶯は時ならねばや」と詠んでいるのも、鶯の鳴き声が本来夏のものではなく、春のものであるという常識を踏まえているであろう。千里が基本的に夏に詠まない鶯を「夏」に配置させたのは、白居易が鶯を初夏詩に詠み込むことに学んだからであろう。句題出典詩以外の用例を掲げる。

残鶯意思尽、新葉陰凉多、春去来二幾日一、夏雲忽嵯峨。（『白氏文集』　巻九　「青竜寺早夏」）

春尽雑英歇、夏初芳草深、（中略）新葉有二佳色一、残鶯猶好音。（同巻六九　「首夏南池独酌」）

傍線部の示しているように、白居易は、「残鶯」を初夏の詩語として詠んでいる。本来春の事物である「鶯」を初夏に移入する詠み方は、鶯を春の名残とし、春への未練を表すためであろう。

また、波線部では、白居易は春の過ぎゆくことと、夏の到来を同時に詠っている。これらの表現からは、惜春の感情が明確に読み取れる。

初晴迎二早夏一、落照送二残春一。（同巻六六　「春尽日天津橋酔吟偶呈二李尹侍郎一」）

「春尽日天津橋酔吟偶呈二李尹侍郎一」では、白居易は「残春を送る」ことを、「早夏を迎ふる」ことの対句表現として用いた。この対句からは、白居易にとって、夏を迎える時期は、春を送る時期でもあることが分かる。

白居易の持つ初夏の時期に春を惜しむという詩想は、上例の千里歌からも同様に読み取れる。二三番歌にある「過ぎにし春を惜しみつつ」は惜春の感情を明言している。この部分の意味に当たるものは句題にないので、この表現は千里が句題に対する理解や解釈を踏まえて敷衍したと考えられる。二五番歌も、本来春に鳴く鶯の声が、季節外れの夏になると、だんだん少なくなっていると詠んでいる。二七番歌は句題出典未詳のため、歌における「鳥」が具体的にどの種類の鳥を指すかは不明であ

るが、千里が句題を翻案した際に、その鳴く時期を「春の経ちぬる時」としている。この表現からすれば、この歌も前述の三首と同じ、春が去っていき、夏が到来した時期の歌に違いない。初句の「かぎりとて」及び鳥の声が「いたく聞こゆる」という表現からも、惜春の感情と呼応する表現であろう。

初夏詠に惜春の歌を入れる営みは、『千里集』に先立つ『万葉集』及びほぼ同時代の『寛平御時后宮歌合』などには勿論、後に成立した『古今集』にも見られず、この時代においては極めて独特な詠み方である。千里歌の歌意が白居易詩の詩想に類似する事実から考えれば、上例の四首の千里歌はは白居易の詩想の影響下にあるものに違いない。

更に、初夏に春の景物を回想する、又は惜春を詠む歌は、後世の和歌資料にも度々見られる。

屏風に

我が宿の垣根や春を隔つらん夏来にけりと見ゆる卯の花

（『拾遺集』　夏　八〇　源順）

四月ついたちの日よめる

桜色にそめしころもをぬぎかへて山ほととぎす今日よりぞ待つ（『後拾遺集』　夏　一六五　和泉式部）

源順歌は、具象的な垣根が抽象的な春を隔てていることを詠じ、春と夏との交替を詠っている。和泉式部歌は、春の代表的な景物である桜の花を歌に詠み込み、春を回想していると言えよう。このような発想は、白居易詩及び『千里集』に見られる発想と類似する。

『堀河百首』から、惜春の表現が初夏題の「更衣」に即して詠われる技法は歌壇で流行した。

堀河院御時、百首歌たてまつりけるとき、更衣の心をよめる

夏衣花の袂にぬぎかへて春の形見も止まらざりけり（『堀河百首』　夏一五首　更衣　三二二　『千載集』　夏一三六　匡房）

捨てていにし春はうけれど夏衣いつしかかへん事をこそ思へ（『堀河百首』　夏一五首　更衣　三二三　国信）

ぬぎかふる花色衣惜しきかな春の形見をたたじと思へば（同　夏一五首　更衣　三二九　師時）

『金葉集』の夏歌にも同様の傾向が窺われる。

卯月のついたちに更衣の心をよめる

我のみぞ急ぎたたれぬ夏衣ひとへに春を惜しむ身なれば（『金葉集』二度本　夏　九四／三奏本　夏　九八　師賢）

上例の四首の「更衣」を題とする初夏歌からも、惜春の気持ちが明確に読み取れる。そして、初夏詠に惜春を詠む傾向は、直ちに『堀河百首』の影響を強く受けている『久安百首』(十六)にも吸収されている。

夜もすがら春を残せる灯の名残はけさもけたじとぞ思ふ

（『久安百首』　夏十首　二二〇　教長）

物いはば残れる春にとひてまし昨日かへりし春の行へを（同　夏十首　五二一　隆季）
ぬぎかふる花の袂のうつり香のかをるや春の名残なるらむ（同　夏十首　六二二　親隆）
あかでゆく春の別れにいにしへの人やうづきといひはじめけん（同　夏十首　七二一　『千載集』　夏　一三八　実清）
惜しむともいなん春をばいかがせむ山ほととぎすはやも鳴かなむ（同　夏十首　九二三　清輔）
帰る春ころもの関や越えぬらん今日より夏に立帰るかな（同　夏十首　一二二二　待賢門院安芸）

上例の六首の傍線部からは、惜春の感情が明確に読み取れる。このような発想は、白居易詩、『千里集』及び『堀河百首』の傾向と一致する。更に、教長歌に見られる「春を残せる」と隆季歌にある「残れる春」は、前引の白居易詩における「残春」を思わせる。この現象は恐らく偶然ではなく、これらの歌と白居易詩との繋がりを示唆する。そして、『久安百首』を撰歌資料とする『千載集』が七二一番歌を夏の巻頭歌としていることも、恐らく初夏に惜春を詠む風潮の影響であろう。その後、『新古今集』「夏」の冒頭部にも、当代歌人の詠作ではないものの、『万葉集』時代及び『古今集』時代の歌人による春と関わる歌が配置されている。このことも、『拾遺集』以来の初夏に惜春を詠むという傾向と無縁なことではあるまい。

春過ぎて夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかぐ山（『新古今集』　夏歌　一七五　持統天皇）
惜しめどもとまらぬ春もあるものをいはぬにきたる夏かな（同　夏歌　一七六　素性法師）

上例の示すように、『拾遺集』から『新古今集』にかけて、惜春が初夏詠の常套として頻繁に詠まれるようになった。それのみならず、白居易詩及び『千里集』に見られる初夏の鶯も、『白氏文集』の句題歌の形で、『新古今集』時代及びその後の歌人によって継承されている。

残鶯意思尽、新葉陰涼多
鶯の夏の初音をそめかへてしげき梢にかへるころかな（『拾玉集』　詠百首和歌　夏十首　一九二三）
残鶯意思尽、新葉陰涼多
さそはれし花のかもなき夏山のあらぬみどりに鶯ぞなく（『寂身法師集』　題文集詩　夏　七）

前述したように、夏歌に鶯を詠むことは和歌の世界では一般的ではない。この二首は、白居易詩を句題としているからこそ、鶯を夏歌に詠み込んでいることは言うまでもない。

上述したように、初夏に桜や鶯などの春の景物を回想する、又は惜春の表現を詠む営みは、白居易による初夏の詩想の延長線上に置くべきものと考えられる。このような傾向は必ずしも『千里集』によって触発されたとは言えないものの、文学史の視点からいえば、千里は、白居易詩から初夏の惜春意識をはじめて摂取した先駆的な歌人として評価されるべきであろう。

四　『千里集』後半部の構造と中国文学

『千里集』前半の四季部と異なり、後半の「風月」「遊覧」「離別」「述懐」「詠懐」という五つの部立は、いずれも『千里集』に先立つ和歌集に見られない。その中に、「詠懐」は句題のない千里の自詠を収録する部立である。これらの部立の名称が中国文学に由来する可能性は、松田武夫氏(十七)と平野由紀子氏(十八)によって指摘されている。松田武夫氏は「漢詩句を題にして詠じた和歌の集なので、冬に続く風月は、風と月とを詠んだ句題に引かれ、遊覧・述懐は、文華秀麗集などの漢詩集の分類からの影響と考えられる」と、「遊覧」「述懐」が『文華秀麗集』の影響下に成立した可能性について言及した。また、「風月部」について、平野由紀子氏は、「風月」は風景を指す漢語であるが、それを部立にするのは千里の創造かと指摘している。また、「述懐」「詠懐」について、平野由紀子氏は千里が六朝時代の述懐詩及び詠懐詩からの影響を受けたと推測している。

『千里集』と『文華秀麗集』との関連性について、筆者は松田氏と同じ見解を持っている。『千里集』の後半は、先立つ『文華秀麗集』との類似性を有する。『千里集』における「遊覧」「離別」「述懐」はそれぞれ『文華秀麗集』における「遊覧」「餞別」「述懐」と対応するように見える。更に、『文華秀麗集』における上記の部立が、『文選』における巻二二「遊覧」巻二〇「祖宴」巻二三「詠懐」に学んでいることは小島憲之氏によって指摘されている(十九)。『文選』では、『文華秀麗集』における「述懐」に当たる部立の名称が「詠懐」である。仮に千里が同時に『文選』と『文華秀麗集』を参照し、「述懐」の後ろに『文選』にある「詠懐」を加えたと仮定すれば、『千里集』後半の部立の由来は大まかに説明できるようになる。ただし、『千里集』と『文華秀麗集』の部立の相違点も明らかである。『千里集』では、上記の三つの部立が連続して配列されているのに対して、『文華秀麗集』では、三つの部立は連続せず、分散している。

千里集：風月　遊覧　離別　述懐　詠懐
文華秀麗集：遊覧　宴集　餞別　贈答　詠史　述懐　（後略）

千里が独創したと思われる「風月」を除き、「遊覧」「離別」「述懐」「詠懐」という順で部立を配列させる文献は管見の限り見あたらないものの、「遊覧」の直後に「離別」を配置させる構造は、『芸文類聚』巻二八～三〇の構造に類似する。

千里集：遊覧　離別
芸文類聚：遊覧　別上　別下

『芸文類聚』は上代より日本人によって活用されてきた類書であるので、仮に儒者である千里がそれを参照したことがあっても不思議ではない。

以上の情報を纏めて推測すれば、『千里集』の後半の部立の名称および配列順は、一つの文献をそのまま踏襲したというよりも、いくつかの文献を参照した上で、独自に部立の配列を行ったと推測するのが最も合理的である。このような操作は、中

国文学に既に存する部立の名称を利用し再構成した結果であろう。

五　『千里集』の「遊覧」と中国文学

前章に言及したように、千里は『芸文類聚』『文選』及びその影響を受けた『文華秀麗集』における部立の名称を参照し、「遊覧」という部立を設置したと考えられる。『万葉集』には、「遊覧」を題とする和歌が既に存在する。その中に見られる中国文学の受容は辰巳正明氏によって指摘されている[二十]。時代の下る『千里集』の「遊覧」に収録された句題と翻案歌を精査すれば、その中にも中国文学の特徴が顕著に見られる。本章は、この問題を中心に論を展開させる。まず『千里集』の「遊覧」の冒頭の四首を掲げる。

山色初明水色新
雲もなくあかき山さへ晴れゆけば水の色こそ新たまりけれ（七九）

猶愛雲泉多在山
白雲のなかをわけつつ行く水[二十一]のめでたきことは山にぞありける（八〇）

借問青山何処高
問ひ知りて雲の梯越えゆかんいづれのかたか山はさがしき（八一）

泉落青山出白雲
行く水の青き山より落ちくれば白雲かとぞ見え紛ひつる（八二）

八一番歌の句題出典は未詳であり、他の三首の句題出典は全て『白氏文集』である。七九番歌の句題出典は「庾楼暁望」（巻一六）、八〇番歌は「遊二仙遊山一」（巻一三）、八二番歌は「題二韋家泉池一」（巻一七）である。詩題から、白居易による原詩の遊覧先は、それぞれ「庾楼」、「仙遊山」、「韋家泉池」であることが分かる。「庾楼」は白居易の左遷された江州にある有名な建物で、仙遊山は都長安の近くにある山、「韋家泉池」は韋姓の家の庭園を指す。しかしながら、千里による翻案歌では、原詩にあるこれらの遊覧先は全て反映されていない。そのかわりに、四首の翻案歌は全て山の景色を歌っている。七九番歌は天気が晴れて、色も鮮やかになった山に、雲もなく、水の色も一新されたように見えることを詠んでいる。八〇番歌は、高い山より流れて来た泉はまるで雲を分けているように見えることを詠じている。八一番歌は、山の上にある雲の梯を乗り越えて、空から山々を眺めるという想像の場面を歌っている。最後の八二番歌も、山より落ちてくる泉が、雲の立つように見えるという山に関する景色を詠んでいる。句題出典詩を暫く忘れて、これらの四首の句題及び翻案歌だけを通読すれば、何れも山を訪れ、或いは山を眺める場面を歌っている。「遊覧」は『万葉集』には歌題として存在するが、部立として、千里以前の和歌集には見られないものである。しかし、「遊覧」を部立として用いる例は中国類書や漢詩文集に存在する。そのため、千里がそれらの文献より「遊覧」を和歌集に導入したと推測できる。仮にそうであれば、千里は「遊覧」という部立の名称のみならず、

（二十一）（八二）

「遊覧」に収める中国文学の詩文をも『千里集』の句題を選んだ時の参考にしたはずであろう。「遊覧」の冒頭部の歌が山を主題とすることは、恐らく偶然ではなく、『芸文類聚』の「遊覧」の冒頭部の構造と照応すると考えられる。

孔子北遊、登二農山一。（中略）天子遂襲二崑崙之丘一。（中略）始皇三十七年、上二会稽山一。（中略）太史公登二会稽山一。（中略）斉景公遊二於牛山一。（中略）楚王登二疆台一而望二崇山一。（『芸文類聚』　巻二八　人部一二　遊覧）

『芸文類聚』の「遊覧」の冒頭部には、歴史上の人物が山を訪れる、又は山を眺める故事が集中的に記載されている。「遊覧」の部立を有し、そして『千里集』より先行する文献の中で、このような構造を持っているのは、管見の限り『芸文類聚』のみである。前章においても言及したように、上代から日本人に利用されてきた『芸文類聚』が千里によって利用された可能性は十分にある。そのため、千里が仮に『芸文類聚』の「遊覧」を参考にして、『千里集』の「遊覧」の冒頭に山を主題とする歌群を配置させたと考えても不合理ではない。

また、七九、八〇、八二番歌には、「泉」（水）と「雲」とが度々詠まれている。両者は、『文華秀麗集』の「遊覧」にも頻りに詠まれる詩語である。

雲気湿レ衣知レ近レ岫、泉声驚レ寝覚レ隣レ渓。（「江頭春暁」御製）

峰雲不レ覚侵二梁棟一、渓水尋常対二簾帷一。（「春日嵯峨山院」御製）

絶澗流中石作レ雷。（「春日侍嵯峨山院」　令製）

一片晴雲亙レ嶺帰。（「嵯峨院納涼」　巨識人）

泉石初看此地奇。（「秋日冷然院新林池」　令製）

水写二軽雷一引二飛泉一。（後略）登レ巒何近二白雲天一。（「秋山作」　朝鹿取）

『文華秀麗集』では「泉」と「雲」とが共に頻りに詠まれることに対して、『芸文類聚』と『文選』の「遊覧」には、「雲」を詠む詩は散見するものの、「泉」と「水」が同時に詠まれる頻度は『文華秀麗集』の「遊覧」より明らかに低い。そのかわりに、『文選』では、「泉」と「雲」とを共に詠む詩作が「遊覧」ではなく、他の部立に散見する。

天泱泱以垂レ雲、泉涓涓而吐レ溜。（『文選』　巻九　「射雉賦」潘安仁（岳））

仰睇二帰雲一、俯鏡二泉流一。（『文選』　巻一六　『懐旧賦』潘安仁）

托二身青雲上一、棲レ岩挹二飛泉一。（『文選』　巻二五　「還二旧園一作見二顔範二中書一一首」謝霊運）

また、同じ傾向は、六朝の庾信の詩にも窺われる。

澗寒泉反縮、山晴雲倒回。（『庾子山（信）集』　巻三「和二宇文京兆遊田一」）

泉飛疑二度一、雲積似二重楼一。（同　巻五　「尋二周処士

弘讓二）

従って、『文華秀麗集』の「遊覧」に見られる傾向も、根本的に言えば日本漢詩人の創造ではなく、実際には六朝文学の詠み方を継承していると考えられる。唐代の詩人である白居易は、六朝時代の詩学を把握していることは当然のことである。そう考えれば、千里が、「遊覧」の冒頭に頻繁に「泉」「雲」などの詩語を含む白居易詩を選んだのも、根本的に言えば六朝詩を下敷きとする現象であり、六朝詩の詩想を白居易詩を通して継承していると言えよう。

叙上のように、『千里集』「遊覧」の冒頭部にある句題は、六朝文学の特徴が顕著に見られる。そして、これらの句題を利用して生まれた翻案歌も、これらの特徴を忠実に保存している。

しかしながら、「遊覧」という部立は、後世の和歌集に伝承されることがないため、和歌集の常套の部立にはならなかった。そのため、本節に述べた「遊覧」における中国文学の特徴も、晩秋の雁の運命と同様に、和歌の世界で広がらなかったと考えられる。

終わりに

『古今集』時代は、従来中国文学の表現を積極的に和歌に取り入れた時代である。そして、『古今集』の直前に成立した『千里集』も、このような時代の流れに従い、中国詩を和歌に翻案しようとした。他の歌人のように、原典を明示せずに漢詩句を和らげる操作（二十三）と異なり、儒者である千里は、序文に「纔搜二古句一、構成二新歌一」とあるように、自分の翻案歌が元の漢詩句を踏まえていることを明言した上に、参照した漢詩句をも『千里集』に取り入れている。このような操作から、千里の漢詩尊重意識が端的に窺われる。

千里が利用した「句題和歌」という形式は、後世の寂然による『法門百首』や定家・慈円などによる「文集百首」などに継承されて、和歌において定着した。この視点から言えば、千里が中国詩の和歌化及び和歌の句題詠に寄与したところは大である。

［附記］

本稿における『千里集』の本文の引用は、桂宮本『千里集』（金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集　句題和歌・千載佳句研究編』（培風館　一九四三）における翻刻による）を底本とし、解釈の便宜のため、仮名を適宜漢字に改める。仮名は、歴史的仮名遣に統一する。但し、擬定家本『千里集』（冷泉家時雨亭文庫編『擬定家本私家集』（朝日新聞社　二〇〇五）による）、伝寂蓮筆本『千里集』（『古筆学大成』第十七巻（講談社　一九九一）による）、西本願寺本『赤人集』（『西本願寺本三十六人家集　三』（国保西本願寺本三十六人家集刊行会　墨水書房　一九七一）による）、を対校本として用い、対校本における本文が優位性を有すると考えられる場合、それによって底本を改める場合がある。歌番号は、伝寂蓮筆本における歌番号を使う。

他の和歌の引用は、「新編国歌大観」編集会『新編国歌大観』（角川書店　一九八三～一九九二）によりつつ、解釈の便宜のため、仮名を適宜漢字に改める。日本漢詩の引用は、『群書類従』第八輯（続群書類従完成会　一九三三）文筆部によりつつ、字体を通行字体に改める。

漢籍は、『十三経注疏附校勘記　礼記』（中文出版社　一九七一）『漢書』（中華書局　一九六二）『芸文類聚』（中文出版社　一九八〇）によりつつ、漢字を通行字体に改める。

本稿は、日本学術振興会特別研究員奨励費補助事業（「和漢兼作の作品集の構造に関する研究」18J12738）の成果の一つである。

筆者は、長年に亘って、句題和歌研究会に参加させていただいており、研究会の諸先生方より御教示を多くいただきました。ここで、句題和歌研究会の諸先生方に深く謝意を申し上げます。

［注］

（一）桂宮本における「僅枝」を伝寂蓮本によって「纔搜」と改める。

（二）小島憲之『国風暗黒時代の文学』補篇（塙書房　二〇〇二）七五～七七頁（『国語国文』第四十六巻一号（一九七七年一月）初出）

（三）松田武夫『古今集の構造に関する研究』（風間書房　一九六五）二九～四一頁

（四）平岡武夫「三月尽―白氏歳時記―」（『日本大学人文科学紀要』第一八号　一九七六）九一～一〇六頁

（五）田中幹子「『古今集』における季の到来と辞去について―三月尽意識の展開」（『中古文学』　一九九七年臨時増刊）七一～八五

（六）岩井宏子『古今的表現の成立と展開』（和泉書院　二〇〇八）四二八頁）七三～七五頁

（七）北山円正「『古今集』の歳除歌と『白氏文集』」（『白居易研究年報』第五号　二〇〇四）一八七～二〇七頁

（八）桂宮本における「深」を『白氏文集』によって「尽」と改める。

（九）桂宮本における「鳴」は文意不明のため誤写と見なし、翻案歌における「鳴く雁」によって、「雁」と改める。

（十）注三　松田武夫著　二六八～二七二頁

（十一）佐竹昭広　山田英雄　工藤力男　大谷雅夫　山崎福之校注『新日本古典文学大系　万葉集』（岩波書店　二〇〇〇　五五二頁）二九九頁

小島憲之　木下正俊　東野治之校注『新日本古典文学全集　万葉集二』（小学館　一九九五　五二六頁）三六〇頁

（十二）注一一『新日本古典文学大系　万葉集』二九九頁

（十三）注二　小島憲之著書　一〇六頁

（十四）桂宮本における「是」を『白氏文集』によって「足」と改める。

（十五）春芽細炷千灯焰、夏蘂濃焚百和香。（「石榴樹」　巻一六）素華春漠漠、丹実夏煌煌。（「題郡中荔枝詩十八韻兼寄万州楊八使君」　巻一八）

（十六）竹下豊「『久安百首』における『堀河百首』の影響」（『言語文化学研究　日本語日本文学編』巻六　二〇一一）

（十七）注三　松田武夫著書　三四頁

（十八）平野由紀子　千里集輪読会『千里集全釈』（風間書房　二〇〇七　二九一頁）二五～二八頁

（十九）小島憲之校注『日本古典文学大系　懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』（岩波書店　一九六四　五二〇頁）二二～二三頁

（二十）辰巳正明『万葉集と中国文学』（笠間書院　一九八七　七五九頁）一〇六～一二八頁

（二十一）桂宮本における「行く暮」を西本赤人歌によって「行く水」と改める。

（二十二）桂宮本における「白雲立つとみぞまがはるる」を伝寂蓮筆

本によって「白雲かとぞ見え紛ひつる」と改める。

（二十三）金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集　句題和歌・千載佳句研究編』（培風館　一九四三）　一一七～一二三頁

（こう　いってい・本学大学院文学研究科博士後期課程修了）